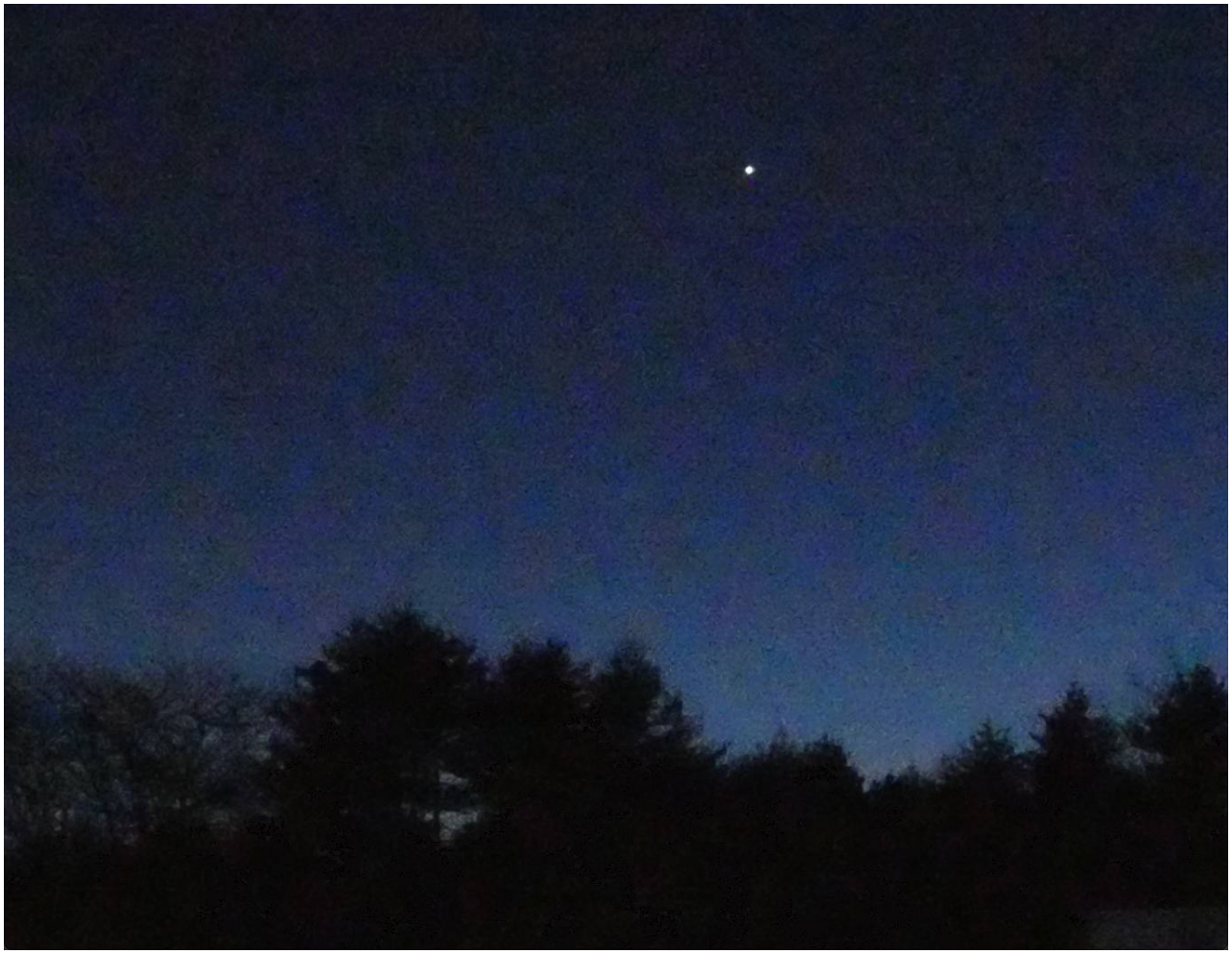
2026_0519「森影の宵の明星」日々の理科 4300 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

夕暮れがゆっくりと夜へ変わっていく空に、ひときわ強く輝く一点の光が見えます。これは「宵の明星」と呼ばれる金星です。まだ空全体が完全な闇になりきらない時間帯にもかかわらず、金星は圧倒的な明るさで存在感を放ちます。写真では、群青色から濃紺へと変化する薄明の空の中に、まるで空に穴を開けたような白い光点として浮かび上がっています。地平近くには木々の黒いシルエットが連なり、地上が静かに眠りへ向かう気配を感じさせます。

宵の明星は恒星ではなく、太陽の周囲を公転する惑星です。しかし、太陽光を厚い雲に反射するため、地球からは非常に明るく見えます。最大ではマイナス 4 等級を超え、全天で最も明るい恒星であるシリウスよりも明るくなることがあります。このため、夕焼けがまだ残る時間帯でもいち早く姿を現します。金星は地球より太陽に近い軌道を回る「内惑星」であるため、真夜中の空に現れることはなく、常に太陽の近くで見えます。夕方に西空で見えるときは「宵の明星」、明け方に東空で見えるときは「明けの明星」と呼ばれますが、どちらも同じ金星です。

また、宵の明星の動きは、細い三日月の動きによく似ています。太陽を追いかけるように西空へ傾き、やがて地平線近くへ沈んでいきます。そのため古くから、人々はこの星に「夕暮れを導く星」「夜の入口を知らせる星」のような印象を重ねてきました。特に山間部や高原、あるいは都市の光の少ない場所では、空の青から夜の黒へ変わる境界の中で、金星の白い輝きがいっそう際立ちます。

この写真でも、まだ完全な夜ではない空に、ただ一つ先に灯ったような金星の輝きが印象的です。周囲に星がほとんど見えていない段階から、まず最初に姿を現す「一番星」。それが宵の明星です。人類は何千年も前からこの星を見上げ、季節や時刻を知り、ときには旅の目印とし、ときには詩や神話の題材としてきました。現代でもなお、夕空に浮かぶ金星には、単なる惑星以上の特別な存在感があります。(2026 年 4 月下旬／群馬県嬬恋村)